

## 自然学校の現場から

### — 食と農をめぐる鹿児島型環境教育の取り組み —

柳田 一郎

環境カウンセラー・NPO法人くすの木自然館理事

From the Scene of the Nature School :  
The Troubles of the Environmental Education on the Food and Agriculture

Itiro YANAGITA

Environmental Counselor

The director of the N.P.O. Kusunokishizenkan

#### はじめに

環境教育のための任意団体「かごしま自然観察会」の有志が、ボランティアの枠を越え、時代のニーズに応える環境教育をおこなおうと「NPO法人 環境教育事務所くすの木自然館」を開設し、今年で9年がたつ。私は、設立以来その運営に参加してきた。

今回、NPO法人が取り組んだ「食と農をめぐる環境教育」の記録をとりまとめた。

これは、自然学校の現場で起こった、予測すらしていなかった食と農をめぐる問題と、その克服の実践報告である。

#### 自然学校をつくろう

鹿児島県が位置する南九州は、照葉樹の森林、黒潮の海、多数の活火山、亜熱帯の島々、そこに住む多様な野生生物という「自然学校」のフィールドとしては申し分のない地の利に恵まれている。

それらの素晴らしい自然と人々との関わりが生み出した文化を次世代に伝えるため、長期滞在も可能な自然学校を作ることは、「くすの木自然館」設立当初からの目標であった。日本各地それぞれの自然環境と文化の違いがあることを前提に、鹿児島でしかできない、鹿児島ならではの自然学校を作りたいと考えた。

そのフィールドとして、豊かな自然はもちろんのこと、その自然が育んだ命の現場、農業や林業など第一次産業の現場が見える場所、周辺に「里山」として機能している森や川が残っている場所、何より地元の方々に受け入れてもらえる心も豊かな地域であること、南九州の自然環境に適した生活が営める歴史を重ねた民家を中心とした場所であること…

そしてこれらを絵に描いたような場所で、「里山自然学校」は始まった。

#### 自然学校が始まった

鹿児島県の北部、最初の国立公園霧島連山の西に位置する始良郡栗野町の幸田（こうだ）集落、日本棚田百選に選ばれた美しい棚田が広がる小さな集落である。森と棚田と石垣と湧き水、幸田川の流れ、ホタルやムササビ、真冬には数センチの霜柱に囲まれる場所、そして人工の明かりが見えないので本物の闇を体験できる場所だ。

快く家を貸して下さった家主さんは集落内に田んぼを持っておられ、自然学校でもそこで育てられた「棚田米」が主食となった。

くすの木自然館の自然学校は、少人数しか受け入れない。フィールドは、集落の人々の生活空間であることはもちろんのこと、周囲の自然環境の中に一度に多人数を受け入れるダメージを少して

も小さくしたかった。子供同士の年齢という縦のつながりを大切に、スタッフが子供達一人一人ときちんと向き合える数でもある。それに何よりも宿舎は民家、結果、宿泊できる人数が私たちが当初から考えていた参加人数（15～16名）程度となった。

スタッフを入れても20名程の自然学校は、集団宿泊学習やキャンプ体験を実施している社会教育機関が100名以上の参加者を相手にしていた当時、とても珍しいスタイルだった。

第1回目の夏休み自然学校が始まり、子供達が九州各県はもとより北は関東から、自分達より大きな荷物を背負ってやってきた。

小学校1年生から中学生まで、日常生活の中では体験できない「素晴らしい自然体験」を求めて、自然学校に参加するのだ。スタッフも、少しでも鹿児島島の自然や美しい里山を子供達の体験の中に織り込むため、多様な自然体験のプログラムを用意した。宿舎では、五右衛門風呂や汲み取り式のトイレ、夜は蚊帳を張って寝るという昔ながらの生活がベースとなる。エアコンやガス風呂しか知らない子供達には、少し不便でも、まずは非常に珍しい体験として受け入れられたようだった。

#### 予測できなかった問題 ―食―

問題は、私たちが全く予測しなかった場面で始まった。

みんなで何度か食事をとるたびに、「問題点」はしっかりと形をなしてきた。

子供達のほとんどが、きちんとした姿勢で食事ができない。8割の子供は、箸をまともに使えない。正座ができない（痛くて足をくずすのではなく、正座の方法がわからない子もいる）。三角食べ・四角食べができない。嚼まずに飲み込む。おかずを食べない。偏食に至っては、なんと嫌いなものは食べなくていい、と思いついでいる子供がほとんどだった。

最初の2・3回の食事にあまりに食べ残しが多いので、たまにかねたスタッフが「残さず食べる」と「量を減らすときは、箸をつける前に言う」を、子供達に提案した。

しかし、家庭でも学校でも、食べ残すことを容認されている子供達には、「なぜ、食べ残してはいけないのか」がしっかり伝わっていないようだった。

私達は、「素晴らしい自然体験」が自然学校の中心プログラムと思いこんでいた。しかし、自然体験も「生活体験」というバックボーンがしっかりしてこそ、人との関わりや他の生き物への理解が実感できるのだと気付いた。生き物として「生きる」ために一番必要な「食べる」という行動の意味がきちんと理解されていない子供達を前にして、私たちが自然学校を通して伝えたいことは何なのか、原点に返って考えなければならなかった。考えてもいなかった衝撃だった。

#### 「うちの子は少食です」の裏側

自然学校に参加を希望する子供達には、申し込み時に「健康調査表」を提出してもらおう。これは参加者の個人ファイルとして、医療機関にかかるときのデータとなる。

この健康調査表に基づいて、子供達の保護者と事前ヒアリングを何度も行っている。

生まれてからの大きな疾病やアレルギー、身体及び精神的な不安、特に注意を要する生活習慣などの有無を話し合う。親子が、安心して自然学校へ参加してほしいからだ。

このヒアリング時に必ず聞き取りをするのが、食生活についてだ。

アレルギー反応を起こす食材の有無、特に目立った偏食の有無、食事時間とその量など、細かいところまでヒアリングする。特に「食べること」にこだわったプログラムを考え始めてからは、事前ヒアリングでの「食」に関するデータは一層重要となってきた。

その中で、特にスタッフが予測しなかったことは、「うちの子は少食ですから」と前置きをする保護者がとても多いことだった。小学校の低学年、特に女の子は、食べるテンポが遅いため給食時間内に食べ終わることができず、結果的に「少食」になる例もある。しかし、年齢や男女差を問わず、「うちの子は少食。」と思っている親がかなりたく

さんいるのである。「うちの子は少食なので、嫌がるようなら無理に食べさせないで欲しい」と、はっきり言う保護者もいる。一生のうちで身体的に、一番「食べる」ことに興味を持つ10歳～15歳の子供達が、どうして「少食」なのか。

私たちは理解できない疑問を抱えたまま、自然学校2年目の夏を迎えた。

### 「ご飯って、おいしいね」

A子ちゃんは小学2年生。家庭は両親と兄二人の5人家族、A子ちゃんは末っ子の女の子だ。彼女もヒアリングのときに「少食なので」と母親が答えた子供の一人だった。

自然学校が始まって3日目の夕方、みんなが川でサワガニと遊んでいると、彼女が少し困った顔をして、「お腹が、気持ち悪い」と訴えてきた。「痛くはないけど、気持ち悪い」とも繰り返す。便秘や下痢の様子もなく、顔色も良い。「気持ち悪い」と彼女が押さえる腹部を触れると、「グルルル〜」とお腹のなる音がした。そのことを彼女に告げると、「お腹がすくって、どんなこと？」と質問が返ってきた。「お腹に食べ物は何も入ってなくて、早くご飯が食べたいよって、A子ちゃんのお腹が叫んでいるの」と答えると、彼女は目を丸くして自分のお腹を見た。彼女は8歳になるまで、「空腹感」を感じたことがなかったのだ。A子ちゃんだけではない。空腹感を覚えずに、三度の食事をとっている子どもはたくさんいるようだ。「少食です」と言われる子供達のほとんどが、しっかりと空腹感を自分で確認しないまま、単なる習慣で食卓に座っている。

彼らの生活パターンは、皆とてもよく似ている。

テレビやゲーム、中には夜10時過ぎまでの熟通い、連日就寝時間は深夜となる。朝は起こされても目が覚めず、朝食はほとんど食べないか、食べても少量だけ。午前中は眠く、昼食（給食）もおいしく食べられず、残すことが多い。午後、ようやく目覚めてきた体は、急激に血糖値を上げることを要求するので、その欲求どおりに、手軽に手に入るスナック菓子や清涼飲料水を流し込み、夕食時には空腹感のないまま「少なめ」の食事を家

族とともにとる。

急激に上下する血糖値は、「空腹感」や「満腹感」は与えてくれない。イライラと脱力感が残るだけだ。生き物として一番大切な成長期に、体内時計に大きな狂いが生じ、まともな「食欲」を奪っている現実、私たちは大きなショックを受けた。「生きる」ことに直結している「食」が、今、子供達にとっては一番遠く離れた事柄になっている。

自然学校の現場には、清涼飲料水もスナック菓子もない。昼間のハードな外遊びのために疲労困憊して熟睡し、朝陽とともに目覚める生活パターンの中で、どの子供達も夜9時過ぎには全員夢の中にはいるようになる。少しずつ体内時計のゆがみが修正されていく。朝の挨拶が「おはよう、お腹すいた!」に変わってくる。一日三回のご飯が、待ち遠しくてたまらなくなる。「少食だから」と親から念を押されたA子ちゃんも、3日目の夕食は山盛り2杯のご飯をおかわりし、ごちそうさまの後に噛み締めるように、「ご飯って、おいしいね」と言ったのだ。

### 「命」を食べる

自然学校の運営の中で、周囲の住民の方々の関わりはとても重要である。原生の自然の中や管理された施設と異なり、自然学校のフィールドは集落の人々の生活域である。そこでの人々とのふれあいや生活体験は、どんなプログラム集にも載っていない素晴らしい自然学校のカリキュラムになっていく。

特に、自然学校の食材は、そのほとんどが地元の方々の協力を得て、地域内でまかなっている。

子供達の「食」への興味を育てたいと強く願ったスタッフは、生産者の方々に、子供達に直接生産の現場を見せ体験させることの大切さを理解してもらった。野菜や卵や米や肉が「生き物」であることを、生産者自身から子供達に伝えてもらいたいからだ。

今まで、スーパーのカゴや箱に入っていた野菜を、子供達が畑から直接収穫する。キュウリのイボが痛いこと。畑でそのまま熟したトマトがとても甘いこと。夏には夏の野菜、冬には冬の野菜が

土から採れること。そのための農作業がとても大変であること。

自然学校に来ている子供達を実際の生産活動に関わせるのは、言葉にするよりずっと大変なことだ。一過性のイベントとしてではなく、時間と手間を掛けた一連の作業が、「農作物」を収穫するまでにどれだけ大切なことなのかを知ること。何より、「生き物」を育てる仕事であることを知ること。地元の生産者の方々は、言葉こそ少なめではあっても、このことをまっすぐに子供達に伝える役割を担ってくれた。

地鶏の卵をもらいにいくと、子供達を鶏小屋に入れてくれる。親鶏の後ろをついてまわるヒヨコ達に歓声をあげ、小屋の掃除やエサやりを手伝わせてもらい、最後に雌鳥が抱いている温かい卵をとらせてもらった。「この卵がもう少ししたらヒヨコになって、半年もしたら若鳥になるよ」と農家の方の話を聞いても、子供達の手のひらの卵と若鳥のおいしい肉は、どうしてもつながらなかった。

宿舎に帰って昼食の用意をしていると、先ほどの卵を割っていた女の子達から悲鳴が上がった。「卵に血が混ざっている」それが有精卵で、心臓になる部分であることや、そのまま親鶏が抱いていたらヒヨコに育つことなど、頭では理解していても、それが自分たちの「食べ物」になることがどうしても理解できない子供達がいた。「気持ち悪い」と繰り返し、卵に寄り付こうともしない。「私たちの食べ物、みんな他の生き物の命なの。生き物の命は気持ち悪いもの？ 私たちもみんな命の始まりは同じでしょ？ あなたたちは食べ物を平気で残して捨てるでしょ？ 命を捨てているんだよ」

スタッフの一生懸命の話に、その場にいた子供達はみんな黙ってしまいました。

しかし、昼食のとれたて卵と若鶏の親子どんぶりを残した子供は、一人もいなかった。

### 命のつながりを食べる

自然学校は、里山だけではなく、離島でも開催している。

離島には離島の食生活があり、それぞれの自然環境に基づいた食文化が息づいている。

黒潮の豊かな海に潜ると、鮮やかな魚たちに出会う。「魚を釣る」などという生やさしい遊びではなく、モリを持って魚を突いて、やっと海の幸を食することができる。地元から参加する子供達が先生になって必死に獲物を狙うが、なかなかうまくいかない。「刺身が一番好き」だと言い張っていた子供も、お腹いっぱい刺身を食べるには、どれだけ魚をとってさばかなければならないかを体験するうちに、骨についた小さな魚身も競うように食べるようになっていく。「命を食べている」という自覚が出てくると、自分たちをとりまく様々な生き物の命に敏感になってくる。もう、食べ残しなど考えられなくなっている。

一番身近な命である、人と人との関係にも影響が見られるようになる。お互いのコミュニケーションに思いやりを込めて、とても丁寧に上手になっていく。自分自身の「命」にも関心を持つようになる。「命のつながり」を「食べる」という行為を通して体験することは、他の生き物の「痛み」を自覚することにもつながるからだ。

「自分達の手で殺した魚だから全部食べる」、「遊びでは生き物を扱えない」、「卵のぬくもりが食べた自分のぬくもりになる」、自然学校を通して、子供達が自らつかんでいく答えは、私たちの予想を上回るほどの「生きる力」を生んでいると思う。

### 伝えたいこと、伝えられること

自然学校を通して接する子供達は、年間延べ150名くらいだが、学校に出かけたり親子体験活動などで出会う子供達にも、私達はたくさんのメッセージを伝え、また、多くのメッセージを返してもらっている。

私達スタッフは、自分達の体験や学習を通して得た知識や知恵をフル活用して、子供達に接している。その知識や知恵の多くは、それぞれの親や祖父母から受け継いできたものが多いことに気づく。様々な生活体験や自然環境に関する考え方が「食文化」を支え、地域の中で、親から子へと受け継いでいくことにより育てられたものだったのだ

ろう。そのつながりが途切れた時、「食」は「生き物」から命の無い「食べ物」になり、痛みや喜びを伴わないものとなっていったのではないだろうか。私達が「鹿児島」という、本当に豊かな場所で自然学校を続けていく中で、最も太く大きな柱となっていったのが「命と食」を通して伝えていくやり方だった。そのことに真剣に向き合っていくと、日本や世界の様々な「見えなかった部分」も見えてくる。それは経済優先の姿勢をとり続けてきた日本が、次世代に伝えることを軽んじてきた部分であり、優先順位の最後の方に送られた「生き物として一番大切な部分」ではないかと思う。

「食べ物」を心からおいしいと思えない子供達が、次の世代を担うということは、どういうことなのだろう。子供達と同じように、たくさんの野生生物を見てきた私達には、それは「生きる」ことを投げやりに考えた人間の未来に思えてならない。人以外の野生生物は、生きる場所も食べるものも自分たちで選ぶ。戦いとる。野生の誇り高い「生きる力」こそが、次世代を担う子供達にも必要で、一番欠けているものではないかと思う。

私達自然学校スタッフの「先生」は、鹿児島の土着の自然であり、その中の野生生物であり、何よりそこに生き続ける力強い人々だ。本当においしい米や野菜や肉や魚のそれらを作り育て、収穫してくれる人々。大切な食材を、一層おいしい食事へと変えていく水や器を作る人の心。それらを包んでなお余りある自然環境……私達が伝えたいものは、そういう風景だ。私達が伝えられることは、その現場にいる人々や生き物の声やぬくもりだ。

### 伝え続けなければならないこと

私たちが伝え続けなければならないことは、「食」を通して、時間を超えて繰り返される「命」のつながりと生き物の「思い」だ。

私達が自然学校を開校した9年前、環境教育の分野だけでなく、学校教育や社会教育の分野においてもあまり重要視されていなかった「食・農・

命」のことが、21世紀の現在、鹿児島県では、教育だけではなく様々な分野での幅広い実践と取り組みにつながっている。

食料供給基地としての自覚が、具体的で先進的な食の安全への動きともなっている。何より、地域性や第一次産業を軽んじることなく、分野を越えて「伝え続けること」を選んできた鹿児島の底力を誇りに思う。どんなに素晴らしい自然環境や次世代に残すべき文化があろうとも、それを大切に思う人々と伝えようとする人々の思いが形にならないければ、それは本物のメッセージとして、受け継がれてはいかない。

自然学校で食べるお米や野菜は本当においしい。水も卵も「本物の味」がする。川も海も闇も風も忘れられないほど美しい。ここにしかないそれらは、何よりも明確なメッセージとして、自然学校に参加する多くの子供達に、そしてその親達に伝わっていくと思う。

豊かな自然の中で、「食」と「農」そしてそれにつながる「命」を伝える環境教育の果たす役割の大きさと大切さを思う。

### 最後に

本報告は、NPO法人くすの木自然館理事長長山芳輝氏と専務理事浜本奈鼓氏の実践報告をもとに構成したものである。

本特集の趣旨に賛同し、貴重な体験に基づく報告に快く協力してくれた長年の友人達に、この場をかりて深く感謝したい。

